



Title	<書評>「父（日本の名随筆49）」（山田太一編，作品社，1,200円）
Author(s)	嶽山
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 53, p. 28-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83736
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「父」(日本の名随筆・49)

山田太一編 (作品社 1,200円)

父を語る息子、娘の見た父、他所の父親の話、父としての言葉などを集めた随筆集である。

私自身「父」となった3週間後に「父」を亡くした。3月余りの闘病生活であった。その時は不思議に大きなショックを感じなかったような気がする。

北杜夫氏のことばに「赤ちゃんだけは、自分の赤ん坊を育ててみないことには、わからない神秘的なものであるらしい」とある。その「神秘的なもの」に日々振り回されていた時期であり、「父」を亡くしたことよりも「父」となった感情の方強かったのかもしれない。

よくも悪くも明治の人であった。しかし、そんな父にある時期をすぎてからそっと「ものわकारいのよい父」を意識した時、ある一抹の寂しさを感じた。

いろいろな人の作品を読みながら、どちらかというと、父をオーバーラップさせながら読んでいくことが多いようだ。

山田太一氏の『父は、一人の男として一所懸命だったり怠けたり自分勝手だったりして生きていた。いわゆる「対話」はなかったが父を追憶してみると、私は父の影響を大きく受けているのであった。その意味では、対話があったというべきなのかもしれない。』

やはり、子供は親を見て育って行くし影響を受けている。ある部分では、気儘に、自分勝手に、そして無理に理解しようとすることなく子供とつきあっていきたい。——願望である。

(嶽山)